

上映映画解説

1957, 4~5

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 46

Un Carnet de Bal

「舞踏会の手帖」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきましたが、今回はその第二六回として、四月一〇日から五月五日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）フランス映画「舞踏会の手帖」を上映します。

この映画は、わが国では一九三八（昭和一三）年六月二日帝国劇場で初公開され、同年度キネマ旬報ベスト・テンの第一位を獲得しました。

舞踏会の手帖

一〇巻

仏フィルム・ヴォグ映画一九三七年度作品

—— スタッフ ——

監督・脚本……………ジュリアン・デュヴィヴィエ
台詞……………アンリ・ジャンソン

撮影……………ベルナル・ズインメル
……………シエル・ケルベール
……………フィリップ・アゴスチイニ
……………ルヴァン

音楽……………モオリス・ジョオベヘル
……………キャスト

クリスチヌ……………マリイ・ベル
オウディエ夫人……………フランソアズ・ロゼエ
ジョオ……………ルイ・ジュヴェ
アラン・レニオール……………アライイ・ポオル
エリック・イルヴァン……………ピエール・シャルル
フランソア・パチュエ……………レエミエ
チエリ……………ピエール・ブランシヤル
フアビアン……………フェルナンデル

Un Carnet de Bal

Christine…………… Marie Bell
Alain Regnault…………… Harry Baur
Thierry…………… Pierre Blanchard

Fabien Contissol…………… Fernandel
Jo…………… Louis Jouvet
François Patuisset…………… Rainu
Madame Audé…………… Françoise Rosay
Eric Irvin…………… Pierre Richard-Willm
Brémond…………… M. Bénard
Jacques…………… Robert Lynen
Cécile…………… Milly Mathis
Gabry…………… Sylvie
Paul…………… Andrex
La Marchande de Journaux…………… Jeanne Fusier Gir
L'Adjoint…………… Genin

「舞踏会の手帖」について

飯 島 正

『舞踏会の手帖』について書くこととしたが、なにしろ二十年にもなるむかしに見た映画なので、大体の感じや局部的におもしろかったという以外は、もう忘れてしまっている。それで当時書いたほくの記事がこうなっているだろうとおもって大分さがしてみたのだが、いいのが見つからない。やっとなんか通信に書いた記事だけができたので、ともあれ、見たときの感じをつたえる意味で、それをここに再録する。（日附はわからないが一九三八年に書いたものであることはたしかだ。）

「これはジュリアン・デュヴィヴィエのもっともあたらしい作品で、昨年パリで封切られたばかりの映画である。

この作品の特異な点は、まずフランス映画界の八人のスターを出演させたばかりでなく、しかも、その八人を単に出演させたばかりでなく、作品構成のうえで、そのスターたちを生かしている。

すなわち、この映画は、マリイ・ベルが扮する女主人公を中心に、七篇のスケッチを彼等に演ぜしめ、一

篇に一人ずつをふりあてているのだ。これはあるいは一つのおもいつきにすぎないかも知れないが、おもいつきがそれだけにおわらず、それらが女主人公の生活にまで影響をもっている点に、デュヴィヴィエの映画作法のすぐれていることを知る。

女主人公は、わかい未亡人である。彼女はふと見いだしたむかしの舞踏会の手帖に書かれた男の名前をたよりに、青春のおもいで巡礼をするのである。

第一の男はすでにこの世を去っていた。彼女に失恋したからだ。これを語るのは、フランソアズ・ロゼエである。

第二の男は、ナイト・クラブの経営者（ルイ・ジュヴェ）。彼女を、むかしなじみの縁故をたよりにかせぎにきた女とまちがえるような男だ。

第三の男は、僧侶となつて、子供たちに聖歌をおしえている（アライイ・ポオル）。

第四の男は、シャモニの山のガイドになつて、女よりも山を愛している（ピエール・リシャルウィルム）。

第五の男は、大統領になるつもりだったが、いまでは田舎の町長におさまつて、女中と結婚する（レエミエ）。

第六の男は、マルセイユのヴィウ・ポオルのいかさま医者で、植民地でかかった半狂乱の熱病にとりつかれている（ピエール・ブランシヤル）。

第七の男は、彼女の生まれ故郷で、調髪師をやっている（フェルナンデル）。彼にとまなわかれて、女主人公は、そのむかしとおなじ町の舞踏会に行く。ところがそれは、おもいでのおうつくしい舞踏会とはまるでちがった安っぽいものだった。

彼女はコロモの湖畔にある自分の家にもどる。彼女がむかし恋していた男の住所が、湖のむこうがわにあることを知って、さっそくそこをおとすれたが、その男は死んでいて、のこされた息子しかいなかった。彼女はその息子の最初の舞踏会のために世話をしている。——ということ、映画はおわっている。

女主人公の出発と帰宅が、プロオグとエピオグとなつていて、この部分は、非常にロマンチックな描写

を見せる。そのあいだに扱われた七つのスケッチは、それほどロマンチック一色にぬりつぶされてはいない。むしろ、皮肉なもの、さびしいもの、憂鬱なもの、んきなものなど、とりどりの風景をくりひろげている。そういう意味で、これはデュヴィヴィエのいままでのいろいろな作風を一つにまとめた観も呈している。くわうるに、スケッチはそれ自身としても、独立したおもしろさをもっている。したがって、多少女主人公は、狂言廻しの感じがし、主人公の心理の推移は、むしろスケッチのならばかたから察しることができるようになっている。

マリイ・ベルはうつくしく、七人のスタアもそれぞれにうまい。ことに、レエミュ、ブランシャル、フェルナンデル、ジュヴェがいい。そして、全体として、いかにも恋愛尊重の気もちのうつくしさと、寛容なベッシスムとが感じられる。」

『舞踏会の手帖』(三七七)を、映画史上の作品として、いままでおもしろい点は、まず第一にこれが、デュヴィヴィエのいわゆる「オムニバス」形式の映画の最初の代表作だということである。

右の文中にもあるように、これはたしかに「おもしろい」であつたにちがいない。そしてそのおもしろいときを、ほくは当時、八人のスタアをならべる商業主義的方法である、まず考えた。

しかも同時に、これはデュヴィヴィエのそれまでのさまざまな作品のやりかたを、一つにまとめたものだともいった。

これが商業主義的方法であると同時に、デュヴィヴィエにとって本質的な映画作法であつたことは、その後のデュヴィヴィエ作品を見ればあきらかである。オムニバス映画乃至それに似た作品は、その後デュヴィヴィエはたくさんつくつてゐる。「わが父わが子」(四〇)、「リディアと四人の恋人」(四一)「運命の饗宴」(四二)、「肉体と幻想」(四三)「巴里の空の下セーヌは流れる」(五〇)「アンリエットの巴里祭」(五二)などを見るがいい。

デュヴィヴィエが、オムニバス以前に自分のいろいろな作品の感じをまとめたということは、「舞踏会の手帖」以後の同傾向の作品にも当然見つけられることであるが、もともとデュヴィヴィエが種種雑多な題材の作品を手がけているのは、彼のプロデュサア的性質によるのである。ほかの監督者のように一本勝負でなく、ずらりとならべたいろいろな映画を、一まとめで御覧ください、といった感じが彼にはある。これはさまざまな作品のみあわせて勝負をするプロデュサアのやりかたである。

果然、戦争中アメリカにわたつたデュヴィヴィエはプロデュサアディレクタアとして立つにいたつた。現在もこの調子で映画をつくつてゐる。また彼が多作家であるのも、この特質と無関係ではないとおもう。

しかしこういふことをいつたからと、「舞踏会の手帖」がすぐれた映画であることにはわりはない。戦後ほくはこれを見ないの、現在見てどう感じるかはわからないが、当時としては、その構成の形式がおもしろいばかりでなく、デュヴィヴィエのベッシスムが甘味かロマンチックなヴェイルをかけている点でも興味があるし、フランス人独特のコントふうなスケッチの皮肉な味もおもしろいし、芸達者な俳優を味を生かすようにつかつた胸前も賞美された。ただ、デュヴィヴィエのいつもの癖で、ときどき雑作なながつた技術的欠陥や行きすぎが目につくのが、気になつたことをおぼえている。たとえ、ピエール・ブランシャルのくだりで、ななめ構図を多少しい加減につかいてきている点などは、その後者の例である。

なお日本で上映されたこの作品のプリントは興行上の配慮からだつたと記憶するが、一部分カットされていた。それはアライ・ポオルのくだりだつたとおもう。いま見るひとは、それを頭においてもらいたい。

これに出演したアライ・ポオル、ルイ・ジュヴェ、レエミュなどの名優は、いまずでに亡き人である。その意味でもこれはおもしろい映画となつた。